

ケモノな上司は
喪女の私にご執心!?

Sana & Jin

藤谷 郁

Iku Fujitani

termity



エタニティ文庫

目次

ケモノな上司は喪女の私にご執心!?

5

書き下ろし番外編
春のぎざし

341

ケモノな上司は喪女の私にご執心!?

小泉佐奈はかつて夢見る乙女だった。

大人の世界に憧れていた十二歳の頃。彼女は同世代の子に人気だったマンガやゲームは早々に卒業し、次のステップに進んだ。

そのきっかけは、母親が愛読する大人向けの小説——シテイロマンスシリーズを読んだこと。翻訳ものではなく、日本が舞台の恋愛小説レーベルである。

書棚の奥から薔薇色の背表紙を選び、こっそり読んで胸をときめかせた。

物語に登場するヒーロー達は、優しく、仕事ができ、超絶イケメン。女性にモテまくりのヒーローとヒロインが恋に落ち、最後は結婚するのがお約束の展開である。

特に佐奈が魅了されたのは、華やかな容姿と洗練されたファッションセンスを併せ持つ、王子様タイプのヒーローだ。太陽のようなまはゆい魅力にあふれた、スタイリッシュな男性。

『私もいつか、そんな人と恋愛したい。もしもめぐり会えたなら、めいっぱいお洒落しな男性。』

て、私から告白するんだ。シテイロマンスのヒロインみたいに、勇氣と自信を持って』

そして高校一年の春、佐奈は理想の彼に出会う。演劇部の王子様と呼ばれる先輩男子だった。

先輩はいつも佐奈に優しく、親切にしてくれる。それに、彼はとてもモテるけれど彼女はいいらしい。

初めて恋をした佐奈は、今までにないほど舞い上がった。そして夢を叶えるため、めいっぱいお洒落してから想いを告げた。

先輩は恋愛小説のヒーローのように受けとめてくれると信じて。それなのに……

『らしくないね。君みたいな子は、地味に生きたほうがいいよ』

そんな言葉と共に、佐奈はぼつんと取り残された。あっさりと立ち去った先輩の後ろ姿は、今でも忘れられない。

佐奈の憧れと夢は、十五歳の春、初恋とともに消えた。それ以来、王子様タイプのイケメンが苦手になった。そしてお洒落を一切やめ、自分らしく——地味な喪女として生きることに決めたのだった。



「よし、準備完了。こんな感じでいいよね、クロ」

佐奈は壁に立てかけた姿見で身だしなみをチェックすると、そう声をかけた。ローチェストの上に置いた小さな水槽の中で、金魚のクロが泳いでいる。二年前の夏、大学祭の金魚すくいで一匹もすくえなかった佐奈が、残念賞としてもらった子だ。

この春、就職と同時に実家を出てアパートで暮らすことになった時、一緒に連れてきた餌をばくばく食べる仕草と、ちょっぴり太めなところが可愛い。ひらひらとフリルのようなひれがついていて、青みがかった黒い体色が特徴の、青文魚せいぶんぎょという品種の金魚だそうだった。

こんな風に話しかけるのは、飼い主としての情だけではない。あの日、赤や黄といった華やかな金魚達に比べ、クロはとてつもなく地味な存在だった。

誰にもすくわれない残り物のクロに、佐奈は仲間意識を感じている。

「初出勤は緊張するけど、頑張らなきゃ。残念賞の私を追加採用してくれた会社のためにも」

気合きあひを入れると、もう一度姿見を覗いた。

佐奈が着ているのは、黒のツーピース。就職活動、入社式、そしてビジネススーツとして着回しているものだ。白シャツは明るい印象があつて落ち着かないので、黒のカットソーを合わせた。ロングストレートの髪を束ねるバレッタも黒。ちなみに、ローヒー

ルのバンブスも黒で統一している。

メイクは、ファンデーションを適当に塗り、色つきリップを引くだけなので素顔に近い。少し……いやかなり地味だけれど、これが佐奈の通常モードである。

「うん、私らしくていい。それに、地味なほうが職場に馴染なじむだろうし」

クロに「行ってきます」と手を振り、ビニール製のトートバッグを持って、玄関を出た。アパートから最寄り駅まで徒歩十五分。歩道は春の陽射しに照らされている。風もなぐ、穏やかな一日になりそうだった。

駅に着くと、目的の電車に乗り込んだ。

幸い、電車はそれほど混んでいない。スーツを着たサラリーマンやOLの横に並び、佐奈は自分が社会人になったのだと実感した。

本当に就職できてよかった——と、喜びを噛みしめながら、苦労した就職活動を思い出す。

佐奈は私立の有名大学文学部で国文学を専攻する、成績優秀な学生だった。

文学研究会に所属し、書評論文で表彰されたこともある。

しかし就職活動では、優秀な成績など意味をなさなかった。書類審査は通るものの、面接ですべて落とされてしまうのだ。

原因は自分でも分かっていた。面接官の質問にビクついたり、自信なさに答えたり

する内気な態度が悪いのだと。

それに、見た目の印象もよくない。ぱっとしない容姿。運動不足のたるんだ身体に、ネガティブな雰囲気。そんな佐奈がいい意味で注目されることはなかった。

希望する出版関係の企業の他にも何十社と受けたのだが、結果は全滅。佐奈がますます後ろ向きになり、就職浪人を考え始めた頃——その通知が届いた。

何と、佐奈の第一志望である大手総合出版社『三崎山書店』に追加採用されたのだ。三崎山書店は、佐奈が愛読するシテイロマンスシリーズの出版社である。

高校時代の失恋で深く傷ついた佐奈だが、シテイロマンスシリーズは読み続けていた。シリーズには好きな作家がたくさんいるし、できれば編集に関わりたい。

だから、ダメ元で三崎山書店にエントリーし、面接でそれをアピールした。思えば、どの面接よりも積極的だった気がする。でも、一度不採用の連絡が来たので、とうにあきらめていたのだ。

それなのに、追加採用された。しかも、驚いたことに……

(文芸書籍部に配属だなんて夢みたい)

先週行われた新人研修で、配属先を聞かされた佐奈は、思わず頬をつねった。

文芸書籍部というのは、その名のとおり文芸書籍を扱う部署であり、シテイロマンスシリーズの編集部も入っている。面接でアピールしたとはいえ、本当に文芸書籍部に行

けるとは思わなかった。

(ひょっとしたら、シテイロマンスシリーズの編集者になれるかも。もしそうなったらどうしよう。大好きな先生方の本に、関わるができるんだ)

そんなことを考えながら、佐奈は浮かれ気分で会社の最寄り駅で電車を降りる。そして改札に向かって歩いてみると……

「ホームでノロノロ歩いてんなよ！」

「ああっ」

後ろから来たサラリーマン風の男に怒鳴られ、どんと突き飛ばされた。佐奈はよろめき、転んでしまう。肩から落ちたトートバッグが、乗降客に蹴飛ばされた。

「ごめんなさい、すみません！」

迷惑そうに見てくる人々に謝りつつ、佐奈は慌てて立ち上がる。

じゃまにならないよう端に寄ろうとすると、知らない男の人に声をかけられた。

「これは、君のか？」

目の前に差し出されたのは、ビニール製のトートバッグ。社名がプリントされた、佐奈の持ち物である。通りすがりの親切な人が、拾ってくれたのだ。

「はいっ、私のかばんです。ありがとうございますごさいま……」

お礼を言おうとして顔を上げ、佐奈は息を呑んだ。

そこに立つのは超絶イケメン。すらりと背が高く、彫りの深い顔立ちは欧米人のよう。薄茶色の髪が、春風になびいている。

(まぶしい……)

太陽を直視したかのように目がくらんだ。

俳優か、それともモデルだろうか。いずれにしろ佐奈とは別世界の人種である。しかも……

(おっ、お洒落の王子様?)

思わずそんなフレーズが頭に浮かぶほど、ファッショナブルな男性だった。

ネイビーのダブルジャケットに、白のチノパンツ。ヴィンテージ風のジャケットのボタンがウエストを絞り、逞しくも美しいスタイルを強調している。

スカーフやベルトなど、小物もこなれた印象だ。一方足元は無地のローカットスニーカーというシンプルな装備である。

(こういうのを抜け感……と、表現するのだろうか)

そんなファッション用語を、シテイロマンスで見かけた気がする。

彼はトートバッグを差し出したまま、声をかけてきた。

「顔色が悪いな。大丈夫か」

佐奈はくらくらしながら、あることに気がついた。

この人は恋愛小説に登場するヒーローそのもの。しかも、佐奈が最も苦手とする、スタイリッシュなイケメンタイプである。

「だ、大丈夫です。ちよつと、立ちくらみがして……」

震える手でバッグを受け取る佐奈を見て、彼は怪訝な表情になる。佐奈の挙動を怪しんでいるのだろうか。

「ご迷惑をおかけしました。えっと……それでは、私はこれで」

「ちよつと待った」

ホームを去ろうとする佐奈を、彼は強い口調で引き止める。麗しい外見に似合わぬ、低くて男らしい声だ。びっくりして立ちすくむ佐奈を、彼はじろじろと見回してきた。

「もしかして、三崎山書店の新入社員か」

「えっ、どうしてそれを?」

佐奈が目丸くすると、彼はバッグを指さす。

「あ……」

それは、三崎山書店の研修で新入社員に配られたトートバッグである。A4の書類が入るちょうどいい大きさなので、佐奈は通勤用に使うことにしたのだ。

佐奈はしばしばんやりした後、ハツとする。

もしやこの男性は、三崎山書店の社員、あるいは会社関係者なのでは。あまりにも別

世界の人なので、すぐにピンとこなかった。

もしそうならビビっている場合ではない。きちんと挨拶しなければ。そう思って口を開いた瞬間、イケメンが話した。

「喪服のような真つ黒スーツに、黒のローヒール。髪を束ねるバレッタまで黒。社名入りのビニールバッグを使い回すそのセンス……まさか、ウチの部署じゃないだろうな」

「は……はい？」

いきなり何の話だろう。口を開けたままぼかんとする佐奈に、彼は手をひらひらと振った。

「いや、何でもない。それより新人は、九時四十五分までに第三会議室に集合だろ。遅れるぞ」

「え？ ああつ、もうこんな時間に」

腕時計を確かめ、佐奈は狼狽する。初出勤で遅刻はマズイ。

「すみません、お先に失礼いたしますー！」

ぺこりとお辞儀をして、改札口へ向かった。

駅を出て歩道を急ぎつつ、やはりそうだと確信する。あの人は新入社員の集合場所や時間を知っていた。ということは、三崎山書店の社員なのだ。

「どこの部署だろう。まさか、文芸書籍部の人じゃないよね」

あんなお洒落王子が上司になったら大変だ。毎日コンプレックスを刺激されて、仕事どころではなくなる。

彼が違う部署でありますようにと祈りながら、佐奈は逃げるように走った。

「いつ見ても立派な建物だなあ」

三崎山書店の本ビルを見上げた佐奈は、心が萎縮するのを感じた。

今日から自分は、この巨大な会社の一員として働くのだ。採用してくれた会社のために全力で頑張るつもりだが、いざとなると怖気づいてしまう。

こんな自分が役に立つのだろうか。

「いやいや、大丈夫。追加採用されたのは、私が必要ってことなんだから」

自分に言い聞かせると、弱気の虫を振り払ってビルに入り、集合場所に向かう。

第三会議室の前に設置された受付では、新入社員が列を作っていた。佐奈もそこに並び、どきどきしながら手続きの順番を待つ。

(……何だか、研修の後にあった入社式と雰囲気が違うような?)

違和感の理由はすぐに分かった。今日はスーツを着ている人が少ない。特に女性はカジュアルな服装が多く、しかも皆明るい色合いだ。黒のリクルートスーツを着ているのは、佐奈一人かもしれない。

そう考えていると、佐奈の順番が来た。受付係の女性にはにこりと微笑み、手続きの案内をする。

「おはようございます。社員証をこちらの機械にかざしてください」

佐奈は先日の研修で配られた社員証を、ぎこちない動きでカードリーダーにかざした。「んっ?」

ピピッとエラー音がした。慌ててやり直す、なぜか正しく認証されない。

「変ねえ、故障かしら」

女性は首を傾げつつ自分の社員証をかざし、きちんと動作するのを確認した。それから佐奈の社員証を見る。

「文芸書籍部の小泉佐奈さん、ですね? 少々お待ちください」

「は、はい」

女性はパソコンを操作し始める。受付でもたつく人は他におらず、佐奈は注目的だ。出だしでつまずいたことが恥ずかしくて、顔が熱くなった。

「あら、配属先が変更されていますよ」

「……えっ?」

佐奈は目をぼちくりとさせる。どうということなのか、よく理解できない。

「小泉佐奈さんの配属先は、文芸書籍部ではありません。雑誌編集部です」

「ええっ?」

予期せぬ事態にうろたえる。すると佐奈の肩を、誰かがぼんぼんと叩いた。振り向くと、恰幅のいい中年男性がにこやかに微笑んでいる。

「失礼、小泉佐奈さんだね。私は人事部長の山本といいます。話があるので、ちょっとこちらに」

新入社員の列を抜け、会議室の隅に連れて行かれた。山本は笑みを浮かべたまま簡単に説明する。

「いやあ、実は雑誌編集部に欠員が出てねえ。大至急、新人から補充することになったんだよ。それで、役員会で話し合った結果、君に決まったわけ」

「そんな……」

（初出勤の日に人事異動って、あり得るの?）

そう思ったが、言葉にならない。

「すまないが、私にはどうすることもできないんだ。上層部の指示だからねえ」

上層部という言葉を彼は強調した。会社組織のトップである役員会の決定となれば、社員は承諾するほかない。ましてや佐奈は新人である。ショックだけれど、頭を切り替えることにした。

「分かりました。それであの、雑誌編集部というのは……」

「おお、分かってくれたか。さすが若い人は柔軟で助かるよ。これは新しい社員証だ。今持っているものは破棄するから、受付に預けておいてくれ」

佐奈が承諾するやいなや、山本は新しい社員証を渡してくる。

「それじゃあ、私はこれで。ああ、君の職場はカードに記載されている。文芸書籍部と多少趣おもむきが異なるが、やりがいのある仕事だぞ。頑張ってくれたまえ」

「えっ、あの……」

用が済んだとばかりに、山本はさっさと会議室を出て行ってしまった。

「職場について、詳しく聞きたかったのに」

職場が記載されているという社員証に目を落とし、佐奈は「えっ？」と首をひねる。見間違いかと思ひ、目をごしごしとこすってからもう一度確かめた。

【株式会社三崎山書店 月刊ヴェリテ編集部 小泉佐奈】

「月刊ヴェリテって……えっ、もしかして」

大学の図書館で見かけたことがある。最新号が配架されると、お洒落しゃれな女子学生が顔を寄せ合い、楽しそうに読んでいた。確か、二十代の女性をターゲットにしたファッション雑誌である。

「ちょっと待って。その編集部が、私の職場？」

何かの間違いだ。どこからどう見ても、お洒落しゃれとは無縁の地味な女なのに、こんな人

事はありません。急いで山本を追いかけてようとしたが、マイクの声に止められた。間もなくオリエンテーションが始まるので、席に着くようにと促うながされる。

もう決まったことなのだ。あきらめる——と言われているのだと、佐奈はうなだれた。

憧れの文芸書籍部で働けるはずが、まったく興味の無い分野へ飛ばされてしまった。

佐奈は沈んだ気分で、同じフロアに向かう新入社員達と一緒に、エレベーターに乗り込む。明らかに浮いている自分を意識しながら。

(どうして、なぜ、こんなことに?)

雑誌編集部に配属される新人は、いずれもお洒落しゃれ感満載の男女ばかり。黒のスーツを着ているのは佐奈だけ。場違いな空気に息が詰まりそうだ。

新人達はエレベーターを十三階で降りた。片側が窓になっている廊下を進み、広々としたオフィスに足を踏み入れる。

引率係の人事部社員は、天井から下がったプレートを指さす。そこには雑誌名が記載されていた。

「ここはファッション雑誌編集部のフロアです。雑誌ごとにスペースが分かれていますので、各々自分の配属先に行き、先輩方に挨拶あいさつしてください」

(私の配属先は、ヴェリテ編集部、ヴェリテ編集部……)

心の中で**舌**ながら、パーティションで仕切られた通路を進んで行く。

オフィスの中でもひと際大きく割かれたスペースに、『ヴェリテ』編集部はあった。入り口から中をそっと覗くと、女性社員が一人、大きなテーブルに書類を並べている。年齢は三十代前半くらいだろうか。無地のカットソーにパンツというシンプルな服装だが、明るく染めた髪と、腰に巻いたサッシュベルトがお洒落で、佐奈を警戒させた。

異星人に接触を試みる気分で、思いきって声をかけてみる。

「す、すみません……今日からヴェリテ編集部に配属された、小泉と申しますが……」

「えっ、あなたが今日からウチで働く……新人、さん？」

彼女は意外そうな顔で、しばし佐奈を見つめた。ファッションにはおよそ縁のない新人が来たので、戸惑っているのだろう。佐奈はいたたまれず、逃げ出したい衝動に駆られる。

しかし、次の瞬間、女性は嬉しそうに笑いかけてきた。

「そうなんだ。私は『ヴェリテ』副編集長の辻本といいます。三十一歳で、編集部唯一の既婚者よ。よろしくね」

「あ……は、はい。よろしくお願いします」

手を差し出され、佐奈はおずおずと握手した。辻本の手のひらは温かく、佐奈の手を力強く握っている。大らかに受け入れられたような気がして、少しホッとしたところ

で――

「なにに、もしかして新人さん？」

話し声が聞こえたのか、奥から他の社員が次々に現れて佐奈を取り囲んだ。

ファッショナブルな若い女性ばかりだ。珍獣を観察するような目を向けられている――気がする。

「うわあ、リクルートスツだ!!」

「事務の人かと思った。でも、逆に新鮮なカンジ」

「うんうん、ウチの新人にしては珍しいタイプよねえ！」

辻本に比べて皆テンションが高く、飛び出す言葉もストレートだ。それに、華やかな彼女達を見て、目がチカチカしてきた。

(ダメだ、やっぱり耐えられない。こんな私がお洒落な方達と仕事なんて無理……)

「お前達、何を騒いでるんだ。仕事しろ、仕事を！」

背後からいきなり大声が飛んできた。このオフィスで初めて聞く男性の声。しかも、命令口調ということは、彼女達の上司なのだろう。佐奈は恐る恐る振り向き、声の主を確かめる。

「ん？ お前は今朝の喪服女子。何でここにいるんだ」

「ひいっ！」

驚きのあまり奇声を発してしまった。声の主は、駅で出会ったスタイリッシュイケメン。お洒落の王子様が、佐奈のすぐ後ろに立っていた。

「も、喪服女子って私のこと？ ……いやそんなことより、この人こそ、どうしてここにいるの？」

駅でのやり取りから、彼は三崎山書店の社員だろうと思っていた。同じ部署になりませんようにと祈ったのに――。佐奈は愕然としてよろめく。

辻本は佐奈の肩をさり気なく支えて、彼に紹介した。

「こちらは新入社員の小泉佐奈さんです。ヴェリテ編集部に配属されました」

なぜか彼は黙っている。すると辻本は、少し困ったように、佐奈にも紹介してくれた。

「えっと……小泉さん、この方はヴェリテ編集長の幸村仁さん。つまり、ウチで一番偉い人よ」

その言葉に、佐奈は顔を引きつらせる。

「へ、へ、へ、編集長？」

つまり、これから佐奈が働く部署のボス。お洒落編集部の頂点に立つ人だ。

しばしの沈黙の後、幸村がようやく口を開いた。

「確かに俺は、大至急人員を補充してくれと人事部に頼んだ。しかし、よりによってこんな……」

彼は険しい表情になり、じろりと佐奈を見下ろす。彼は端正な顔立ちの超絶イケメン。それだけに怒った顔はすこみがみがあり、佐奈は蛇に睨まれた蛙のような状態になる。

（こっ、怖いよお）

怒りの余波を恐れてか、辻本以外の部員はいつの間にか奥に引っ込んでいた。各々、デスクからこちらの様子を窺っている。でも、やはりどこか面白がっているように感じるのは、気のせいだろうか。

こんな状況に、佐奈はもう耐えられない。辞退することに決めた。

「すみません。私にファッションの仕事は無理ですと、人事部に伝えてきます」

頭を下げて幸村の脇をすり抜けようとした。どうせ追い返されるなら、逃げたほうがましである。

「待て。この先どうするかは俺が決める」

佐奈はびたりと足を止めた。見上げると、彼は険しい顔のまま佐奈に命じる。

「そこで大人しくしてろ。動くんじゃないぞ」

「は、はいっ」

幸村はデスクに置かれた電話機を取り、内線番号を押した。

「もしもし、人事部か。ヴェリテ編集部の子村だ。山本部長に代わってくれ」

人事部長に電話が繋がると、幸村は「なぜ小泉佐奈をヴェリテ編集部に寄越したん

ですか」と率直に質問した。

佐奈は大人しく待機しながら、幸村の整った顔とスタイリッシュな姿から目を離せない。王子様のような風貌ふうぼう、そして物事に対するアグレッシブな姿勢は、シテイロマンズシリーズのヒーローそのものだ。つまり、佐奈とはまったく縁のない人物である。

雑誌編集部に配属されたのは、やはり間違いだった。そんな結論に辿り着く予感がする。「……何ですって。江藤専務えとうの推薦？」

幸村がいきなり声を上げたので、佐奈はビクツとした。彼は悔しそうに唇を噛み、「分かりました」と返事をしてから受話器を置く。

急にどうしたのだろうか。わけが分からないが、辻本や他の部員は納得の表情を浮かべている。

幸村は佐奈に向き直り、険しい……というより、あきらめた顔で結論を告げた。

「小泉佐奈。キミは今日から、ヴェリテ編集部の一員だ。一人前の編集部員になるべく、しっかりと仕事をしろ」

「えっ……私、ここで働くのですか？」

予想外の展開になり、佐奈は困惑する。

「驚いているのは俺も同じだ。君も腹をくくるんだな」

彼はこちらに手のひらを向け、文句を封じた。一体全体どうなっているのだろうか。

「辻本さん、そんなわけだ。かなり骨が折れるだろうが、教育係を頼まれてくれないか」
「はい、編集長」

辻本はにこりと笑い、快諾する。よく分からない状況だが、彼女が迷惑そうでないのが佐奈には救いだった。

「そうと決まれば自己紹介だ。こっちに來い、小泉」

幸村は大きなテーブルの正面に佐奈を立たせると、奥にいるメンバーを呼んだ。先ほどの先輩達がぞろぞろと集まり、好奇心に満ちた目を向けてくる。

「今日からヴェリテ編集部で働くことになった、新入社員の小泉佐奈さんだ。辻本さんに教育係を任せるが、皆もどんどんしごいてやってくれ」

編集長の言葉に、部員達は明るく「はい」と答える。

まだ割り切れていない佐奈だが、幸村が言うとおり、腹をくくるしかなさそうだ。そうとなったら、できる限り頑張ろうと、心を決める。

佐奈はとにかく頭を下げた。何しろこちらはファッションセンスゼロ、しかも編集作業について何も知らない、素人だ。先輩方に教えを乞うのが一番の近道だろう。

「勤務時間は十時から十九時と決まっているが、実際は不規則だ。締め切りが近づくほど帰りが遅くなるし、泊まり込みも普通にある」

今日は企画会議を行うので、十一名の編集者全員が出勤していると幸村は教えた。平

均年齢二十八歳の編集部は女性で占められている。

「君が希望した文芸書籍部とは時間の流れが違う。その点、覚悟しておくんだな」

「……承知いたしました」

どうやら幸村は、人事部長から佐奈がここに来るまでの流れを聞いたらしい。『だが甘えは許さんぞ』と、彼の厳しい口調が釘を刺していた。

「ところで小泉。一つ、質問がある」

幸村は佐奈の姿をあらためて見て、ため息をついた。

「身内に不幸でもあったのか？」

「はい？」

何を言われているのかよく分からず、問い返してしまふ。しかしすぐに服装について言われているのだと気づいて、かあつと身体が熱くなる。

しかし幸村は、ふざけて笑いものにするといった態度ではなく、真剣そのものだ。

「いいか、ここはファッション雑誌編集部だ。喪服はやめろ。明日から普通の格好をして来い」

「でもあの、この服は喪服ではなく仕事用のスーツで……」

「何か言ったか」

「いいえっ」

鋭く光る目が怖くて、言葉を呑みこんでしまふ。

しかし佐奈は少しためらったあと、勇気をふりしぼって確認した。

「あ、あの、普通の格好というのは、私服……普段の服装ということでしょうか？」

「まずは手持ちの服で十分だ。とにかく喪服は絶対禁止。それから、社名入りのビニールバッグを使い回すんじゃない」

つまり、喪服のように黒いリクルートスーツと、ビニールバッグを使わなければならないということだろう。

「わっ、分かりました」

恥ずかしいやら怖いやらで、佐奈はおたおたしながら頷いたのだった。

——それから半日少々。波乱の初出勤は終わった。場違いな現場で緊張している上に、編集長にビクつく佐奈を、教育係の辻本が親切に指導してくれたのが救いである。

佐奈はヴェリテ編集部を出て、エレベーターに向かった。

「……あり得ないほど疲れた。私、明日からやっつけていけるのかな」

今後について考えると気分が落ち込み、足取りも重くなる。節電のためあちこちライトが消された薄暗い廊下を、とぼとぼと歩いた。

腕時計を見ると、定時の午後七時を回ったところ。他の編集者はまだオフィスに残っ

ているが、新人はやることがないから帰れと幸村に言われ、一人だけ退社したのだ。エレベーターホールに着くと、そこには誰もおらず、シンとしている。エレベーターを待ちながら、佐奈はふと思いついたことがある。

幸村が人事部に抗議の電話を入れた時、彼が口にしたセリフである。

——何ですって。江藤専務の推薦？

つまり、その江藤専務という人が、佐奈をヴェリテ編集部に推したということだろう。人事部長の山本も、今回の人事は上層部の指示だと言っていた。

あの恐ろしい幸村ですら、専務の名前を聞いたとたん抗議をやめた。役員権威つてすごいと感心する一方で、その人がなぜ佐奈を推薦したのか謎が残る。

首を傾げていると、エレベーターの扉が開いた。奥に女性社員が一人いたので、佐奈は会釈してから乗り込む。

「あれっ、もしかして小泉佐奈さん？」

名前を呼ばれてそちらを向くと、その人はにこっと笑いかけてきた。親しげだが、顔に見覚えがない。

「すみません、あの……失礼ですが、どちら様でしょうか」

「ああ、ごめんごめん。こっちは知らないよね」

ショートレイヤーの髪、ポロシャツにデニムというボーイッシュな女性だ。くるっと

した大きな目が美しい。

「初めまして。私、文芸書籍部第二課の椎名瞳です」

「文芸書籍部の、編集さん？」

椎名は頷き、胸ポケットにつけた社員証を示す。確かに、文芸書籍部の編集者であった。

「ウチに入るはずだった小泉さんでしょ？ 後輩が仲間になるっていうから、楽しみにしてたんだけどなあ」

「後輩……といますと？」

彼女曰く、佐奈と同じ大学の文学部出身で、三崎山書店に入社したのは二年前なのだという。

「ゼミは違うけど、小泉さんの顔と名前は知ってたんだー」

「そ、それはまたどうして」

「書評集に写真が載ってたもん」

大学時代、佐奈は文学研究会に所属していた。書評集というのは研究会発行の季刊誌である。佐奈はシテイロロマンスシリーズの書評を連載していた。

「えっ、あれをお読みになられたのですか。うわあ……お恥ずかしいです」

「何で？ よく書けてたよ。だから、ウチに入ったらバリバリ活躍するだろうなって、

編集部一同期待してたんだけど」

佐奈が返事をできずにいると、エレベーターが一階に着いた。椎名も帰るところだそう
うで、駅まで一緒に歩くことになった。

その道すがら、佐奈はシヨックなことを知る。

椎名が在籍する文芸書籍部第二課はシテイロマンシリーズを担当している部署。そ
して、佐奈もその一員になる予定だったという。今朝からシヨックの連続だが、とどめ
を刺された気分だ。

「そんな……そんなことって……」

よろめく佐奈に、椎名は同情の目を向けてくる。

「初出勤の日に配置換え。しかも、よりよって行き先はヴェリテ編集部かあ。あそこ
は編集長が強烈だよね」

分かってくれますか——と、佐奈は泣きそうな顔で彼女を見返す。

「知ってる？ 編集長の幸村さんって、元ファッションモデルなんだよ」

「そうなんですか？」

「社内に限らず業界では有名な話だね。元モデルなだけあって幸村さんは、あのとおり
スタイリッシュなイケメンで、その上仕事ができるから女子にモテモテ。でも、噂で
は……」

椎名は真顔になり、急に声を潜めた。

「王子様みたいな外見に似合わず仕事の鬼で、自分だけでなく他人にも厳しく、性格は
ドS.だとか」

「ひえええ」

幸村の鋭い目つきを思い出し、佐奈はぶるぶる震える。

「そこへいくと、うちの相馬さんは理想的な上司だね。全然お洒落じゃなくて地味だけ
ど、そこそこイケメンで性格は穏やか。仕事は完璧にできて、それでいて威張ったりし
ないんだよ」

相馬というのは椎名の上司で、文芸書籍部第二課の編集長だという。自慢げに話す椎
名が、佐奈は心底羨ましかった。

「そうそう、幸村さんと相馬さんは同い年の二十九歳で、同期入社らしいの。どちらも
仕事で実績を上げていて、ライバル関係なんだって」

「二十代で編集長……タイプは違えど、お二人とも有能な方なのですね」

同じ有能な上司なら、相馬の部下になりたかった。お洒落でドSな王子様が上司なん
て、ついていける自信がない。

しゅんとする佐奈の背中を、椎名が励ますようにぼんぼんと叩く。

「まあまあ、そう落ち込まないで。幸村さんのもつてで修業すれば、編集者としてすぐに
一人前になれるよ。頑張れ、新人！」

「あ、あう……ありがとうございます」
幸村編集長のもとで働くのは、仕事ではなく修業なんです。先輩に明るく応援されても、佐奈の気分は沈む一方だった。

「ただいまー、クロ。疲れたあー」

アパートの部屋に辿り着くと、佐奈は帰宅中に買った夕食が入った袋を床に投げ出す。そして、ベッドにはったりと倒れ込んだ。嵐のような一日を過ごした主人をよそに、クロが水槽の中でゆったりと泳いでいる。

自分の巣に帰ってきた安心感からか、佐奈は一気に緊張が解けて、そのまま短い眠りに落ちた。

目を覚ましたのは一時間後。むくりと起き上がると、お腹がぐうと鳴る。

「とりあえずご飯を食べよう。お風呂は後でいいや」

エコバッグから、梅干しのおにぎり三個と納豆巻き二本を取り出し、小さなテーブルに置く。ペットボトルの麦茶を開けて、遅い夕食を始めた。

炭水化物が大好きな佐奈は、肉や野菜をあまり食べようとしない。実家では母親が食生活に気配りしてくれたが、一人暮らしを始めてからは栄養が偏りがちだ。

健康に悪いと思うが、さほど深刻には考えない。もともと頑丈で体力に自信がある

し、ビタミン不足で肌荒れしても、美容に関心がないので平気だった。

「ふうっ、いっぱい食べちゃった」

麦茶を飲み干すと、膨らんだお腹をさする。おにぎりも納豆巻きも、テレビニュースをぼんやり眺めるうちに食べ終わっていた。気がつけば明日の朝食用に買ったメロンパンまで平らげている。

ストレスのせいで食べすぎたかなと苦笑しながら、テーブルに広げたごみを手早く片付けた。

「さてと……」

お腹がいっぱいになったところで、今後について考え始める。

文芸書籍部ではなく雑誌編集部に配属されたのは、どうしようもない現実だ。

そして佐奈は明日から、仕事の鬼でDSと言われる幸村編集長のもとで働く。いや、修業するのである。ファッション雑誌ヴェリテ編集部の一員として。

「この格好じゃダメだって言われたっけ」

黒いリクルートスーツを見下ろし、幸村の言葉を思い出した。

「まずは手持ちの服でいいんだよね」

のっそりと立ち上がり、部屋の隅に置いた衣装ケースの前に移動する。中にはブラウス、セーター、綿パンツなどが入っており、色はすべて黒。

「全身黒だと落ち着くんだけど……さすがにまずいかな。いや、でも、モード系とかいう黒を基調にしたファッションがあったような。うん、その線で通せば大丈夫でしょ」聞きかじったことがあるだけの曖昧な知識を思い出し、よしよしと方向性を決める。ブラウスの上にカーディガンを羽織り、動きやすいズボンを書くことにした。スーツと違ってカジュアルな格好なので、喪服と言われることはないだろう。

洋服の次はバッグだ。社名入りのビニールバッグはやめて、いつも使っているトートバッグにする。かばんなんて何でもいいのに、とこぼしながら荷物を詰め替えた。明日の用意ができると、お風呂に入り、寝る準備をしてベッドに潜る。

明かりを消した天井を見ていると、幸村の端麗な顔が頭の中に浮かんできた。元モデルで、お洒落で、華やかな男性。そんな人にビシバシ怒られる日々が続くかと思うと、涙が出そうになる。

「どうして私がかんな目に……」

唇を噛み、独り言を引つ込めた。せっかく就職できたのに、文句を言ったら罰が当たる。望まぬ職場だろうと嫌な上司だろうと、社会人なら我慢しなくては。自分に言い聞かせると、あきらめたように瞼を下ろした。

「どういうつもりだ」

「え……と。どういうつもりと言われてますと?」

翌日の午前九時三十分。他の部員はまだ出勤しておらず、オフィスには佐奈と幸村の二人きり。

美形の編集長は、彼のデスクの前に立つ佐奈をじろりと睨み上げた。

もしかして彼は、怒っているのだろうか。佐奈はおどおどしながら、その理由を懸命に探す。

今朝は早めに出勤して、デスクの上を拭いたり、お茶の用意をしたり、新人としての仕事をきちんとこなした。幸村がオフィスに現われたのはついさっきである。「おはようございます」と挨拶もした。なぜ睨まれるのか分からず、佐奈は立ちすくむ。

「俺の話を聞いていなかったのか」

「はい?」

きよとんとする佐奈に、幸村は呆れたように言う。

「どうして今日も、全身真っ黒なんだ」

「……あ」

そこでようやく佐奈は分かった。幸村が怒る理由が、この服装にあるということ。

黒いスーツがいけないのだと思っていたが、全身を黒でまとめていることがまずかつたらしい。でも、真っ黒を否定されては、着るものがなくなってしまう。だって、黒以

外の服は持っていないのだ。佐奈は用意しておいた言いわけで、この場を凌ぐことにする。「すつ、すみません。でも、これが普段の服装なんです。モード系、みたいな?」幸村の片眉がぴんと上がる。上手い言いわけをしたつもりが、彼の気に障ったようだ。不穏な空気が漂い、オフィスが暗雲に覆われていく気配を察する。

「モード系、だと?」

「あああ、あのつ……はいっ。たぶん……そうだと、思うのですが」

鬼編集長はゆくりと立ち上がり、しどろもどろの新人を見据える。元モデルだけあって彼は背が高く、一六〇センチ以下の佐奈からすれば、恐怖の巨人だ。

潰される——と、本能が警鐘を鳴らす。

「おはようございまーす」

その時、他の社員達が出動してきた。助かった。巨人に慣れた先輩方が、上手くなだめてくれるだろう。佐奈は期待するが、暗雲に気づいた彼女らはそそくさと自席に散ってしまふ。

辻本だけがかるうじて残り、そつと見守っている。

「何がモード系だ!! モードというのは、時代をリードする最先端のファッションを指すんだ!」

特大の雷が落ち、全身がびりびりと痺れた。佐奈は恐怖を通り過ぎ、もはやあの世に

送られた気分である。さつきまで巨人だと思っていた彼が、今度は閻魔様になった。こうなったらもう、閻魔様の裁きを大人しく受けるしかない。

幸村はデスクを回り込み、佐奈の正面に立った。佐奈の格好を上から下まで検分している。

「真っ黒というのもあれだが、デザインがえらく古めかしいな。いつ、どこで買った服だ?」

「ええと、このブラウスは大学一年の冬に、フリーマーケットで購入しました。カーディガンは確か……まだ最近だったような。そうだ、近所の洋品店で閉店セールをやっている、七割引きで買ったものです。それからズボン……」

「ああ、分かった。もういい」

佐奈の言葉を、幸村は遮ってため息をつく。怒るといふより呆れているようだ。

「腰回りを膨らませただけのサルエルもどき。一昔前の量販店でよく見かけたな。サイズが合っていないし、生地が随分くたびれている……。何年も着ているか、誰かのお下がりがかだろう」

「ああっ、そうです。従姉がくれたものです」

幸村の推理に佐奈は驚愕した。洋服の型や状態からそんなにいろいろ分かるなんてすごい。サルエルとは何か知らないが——さすがファッションに精通するプロだと感心

する。

「要するに、小泉は着るものに興味がなく、流行に無頓着でセンスもゼロ。洋服に投資せず、あるものを着ればいいという考え方だ。俺には理解不能な感性の持ち主だと、よく分かったよ」

幸村は佐奈についてあらためて認識し、失望を深めたようだ。ファッション雑誌編集者として、これほど不適格な人間がいるだろうか、と考えているに違いない。

「質問を変えよう。なぜ他の色の服を着ない。黒にこだわるのはどうしてだ」

「黒なら目立たないと思ひまして」

佐奈は自分に魅力がないのを知っている。だから、なるべくひっそりと生活したい。目立たないための色を選んだ結果、黒に落ち着いたのだ。

「はあ?」

「それに、黒は誰にでも似合う無難な色ですし」

「小泉、お前……」

幸村の目がカッと光ると同時に、佐奈は顎をすくわれる。どアップで睨まれて身動きがとれない。美しすぎて、まぶしすぎて、目を開けているのがやっとなった。

「ああ、あのっ……すみません。私、お気に障ることを言いましたでしょうか」

「情けない、何という後ろ向きな思考だ。ここまでネガティブかつセンスゼロの新人が

ヴェリテの一員になるなど、許せん」

「わ、私もそう思います。やっぱり人事部長に相談を」

「いや、逃げるのは許さん。お前も俺もな」

いつの間にか、先輩部員が周りに集まっていた。流行の服を着こなす彼女達は、街中でも目立つ存在だろう。佐奈は一生かかっても、あんな風になれない。

「でも、私はこんだし……自信が持てません」

「昨日、腹をくくれと言ったはずだ」

幸村は顔を離すと、佐奈を支えてまっすぐに立たせた。その力強さに、佐奈はドキッとす。男性に支えられることなど、かつて経験のない触れ合いである。

「誰だって初めは苦労する。後ろ向きなところがある小泉の場合、人の二倍三倍の努力が必要だろうが、やってやれないことはない。最初からあきらめるな」

「は、はいっ……」

幸村は外見に似合わず身は体育会系らしい。運動部の先輩が、意気地なしの後輩を叱咤激励するといったノリである。そこには不思議な説得力があった。

「まずは仕事を覚えること。ファッションセンスは……そのうち周りに影響されるだろう」

ほんと背中を押された。よろよろと前に出る佐奈を、辻本と先輩達が取り囲む。

「というわけで、これから遠慮なくしごくわよ」

「この仕事、実は体力勝負だから。根性出して頑張つてね、小泉さん」

「よ、よろしくお願いします！」

幸村の言うとおり、こうなつたらもう腹をくくるしかない。ファッションセンスはどうしようもないのでさておくとして、せめて仕事を頑張ろうと決めた。

社員食堂の一角で、佐奈は教育係の辻本と向き合っている。本日のランチセットを食べたあと、月刊ヴェリテの概要と、雑誌ができるまでの細かな流れについて講義を受けた。ヴェリテは二十代の働く女性をターゲットにしたファッション雑誌である。コンセプトは成長と充実。日常生活を彩るカジユアル&フェミニンなスタイルを提案している。「バッグや靴、アクセサリーや香水など、洋服以外のラインナップも充実してる。それぞれのページに担当者がついて、記事を作っているの」

「なるほど、なるほど」

熱心にメモを取る佐奈に、辻本は少し困つたように笑う。

「せっかくのお昼休みなのに、仕事の話ばかりじゃつまらないでしょ」

「いえ、早く仕事を覚えたいので、いろいろ教えていただけ的是があります。あつ、もしも辻本さんがご迷惑でしたら……」

「ううん、私は構わないけど、あなたが疲れてしまわないか心配なの。真面目な新人さんほど、燃料切れに気づかなくて、潰れてしまうことが多いのよ」

先輩社員の、経験をもとにした話である。佐奈は納得して、ペンと手帳をテーブルに置いた。

「すみません。つい焦つてしまつて」

辻本は微笑むと、席を立ててカフェカウンターへ行き、二人分のコーヒーを手に戻ってきた。驚いた佐奈は財布を出そうとするが、彼女は受け取らない。

「いいの、いいの。今日は特別におごつてあげる」

「あつ、ありがとうございます」
 コーヒーは温かくて美味しかった。気持ちが悪く落ちて着いて、さつきよりも視界が広がった気がする。

「……いろんな部署の人がいますね」

佐奈はコーヒーを飲みつつ、あらためて周りを眺めた。百席ほどの食堂は、多くの社員で賑わっている。

「そうね。でも雑誌編集者はあまりいないよ。午後から出てくる人もいるし、ここを利用する人は少ないかな。それに、忙しい時はゆっくり食べていられないし」

ヴェリテ編集部は毎月、企画、取材、撮影、原稿作成、印刷所への入稿といった作業

を繰り返し、雑誌を作っている。幸村編集長のもと、各編集者が記事を上げていくのだという。

「まずは企画を練り、ページ構成を考え、撮影の日程など計画を立てる。それから、カメラマンやモデルの手配、ロケ用の弁当の用意など、細かな仕事もやるの。締め切りがあるの、のんびりしてられない。それに毎月のことだから、記事を仕上げる合間にも、次号の企画を立てたり、班ごとにミーティングしたりする」

ヴェリテだけでなく他の雑誌編集部も、夜遅くまで仕事をする社員が多いらしい。中でも、最終的な締め切りである『校了日』近くは、どの編集部も修羅場だという。泊まり込むこともあると、幸村は言っていた。

（雑誌の編集者って、大変なんだなあ）

カップを持つ手が小さく震えた。その修羅場を、これから自分も経験するのだ。想像しただけで怖気づいてしまう。

それからも作業について教えてもらい、区切りのいいところで辻本は切り上げた。

「それじゃ、私は写真部に寄ってから編集部に戻るわ。あなたはちゃんと休憩しなさいね」
辻本が先に行ってしまった、佐奈は何となく居心地が悪くなる。ゆっくり休憩などできず、コーヒーを急いで飲み干して席を立った。

「あっ、小泉さんだ」

明るい声で呼ばれ、そちらを向くと文芸書籍部の椎名がいた。彼女も食事を終えたように、返却口に食器を戻している。

「調子はどう？」といつても、まだ二日目か」

あははと笑い、佐奈の肩をぼんぼんと叩く椎名。気さくな先輩に出会い、少し気が楽になった。

「そうだ、編集長に紹介するよ。こっちこっち」

「え、あの、ちょっと待つ……」

強引に連れて行かれた窓際の席に、一人の男性が座っていた。文庫本を片手に、食後のコーヒーを飲んでいる。

「お寛ぎのところ失礼します。相馬さん、こちらヴェリテ編集部の小泉さんです」

「うん？」

その人は椎名の横にいる佐奈に気づくと、文庫本を閉じて立ち上がり、爽やかに微笑んだ。

「ああ、君がうちに配属される予定だった新人さんか」

「は、はいっ。小泉佐奈と申します」

慌てて頭を下げた。相馬というのは、椎名の上司の名前である。ということは、シティロマンスの編集長だ。

「君のことは椎名君からよく聞いています。入社早々大変だったね」

「え、ええ、その……恐縮です」

「おどおどと顔を上げ、相馬と目を合わせて、佐奈はハツとする。

椎名は彼のことを、そこそこイケメンと表現した。しかし実際に見る相馬編集長は、服装は派手ではないものの、凛々しい顔立ちの美形だ。

「文芸書籍部の相馬智紀ともきといいます。どうぞよろしく」

「よっ、よろしくお願いいた……いたしまっ」

緊張のあまり囁んでしまった。笑おうとしても上手くいかず、頬が引きつる。

ただでさえみつともない容姿なのに、不気味なやつだと思われてしまう。彼はきつと、さつさと立ち去るだろう。佐奈はそんなネガティブ思考おぼっに陥った。

しかし相馬はその場に留まり、微笑ましそうに佐奈を見つめている。佐奈は不思議に思いながら、だんだん冷静になっていく自分に気づいた。

相馬は知的で落ち着いた魅力みちりょくを持つ紳士なのだろう。同じ編集長でも、幸村とは物腰や口調がまったく違う。

椎名の言うとおり、まさに理想の上司である。

(それに比べて、あの人は……)

幸村の恐ろしい顔が目につかぶ。何かと睨にらんでくるし、大きな声で怒るし、威圧的だ

し。もともと苦手なタイプなのに、仕事の鬼でDSだなんて最悪のコンボである。探せばいいところがあるのだろうか、今はまだまったく見えてこない。

相馬編集長が上司だったらなあ、虚しい望みを胸で繰り返した。

「小泉さんはシテイロマンシリーズの愛読者だと聞いたよ。今は忙しいだろうが、余裕ができたら編集部に遊びにおいで。新作の感想を聞かせてくれるとありがたいな」

「えっ、いいのですか?」

「もちろんだよ。いつでも気兼ねなく来てくれて構わないからね」

思わぬ誘いを受けて、佐奈は舞い上がる。憧れのレーベルの編集者とお話ができるなんて夢のようだ。

「はいっ、ぜひおじゃまさせてください。嬉しいですよ」

一読者として幸せを感じる。頷く相馬に、今度は自然に笑うことができた。

「相馬さん、他部署の人を誘うなんて珍しいですね」

「ん?」

椎名が不思議そうに覗き込むと、相馬はなぜか、照れたように視線を外した。

「そりゃ、ファンだと聞けばお招きするさ。別に深い意味はないよ」

「ふうーん、そういうものですか……と、喋しゃべってたらこんな時間だ。小泉さん、やばくない?」

椎名に言われて腕時計を見ると、休憩時間が終わる直前だ。佐奈は青ざめ、忙しなく挨拶すると、社員食堂を飛び出した。遅刻したら、鬼編集長にどやされてしまう。(相馬編集長か……優しい人だった。幸村編集長とライバル関係だって話だけど……) タイプの違う二人なのに、どうしてそんなに意識するんだろう。ふと考えるが、休憩時間の終わりを告げる腕時計のアラーム音に驚き、疑問を抱いたことすら頭から吹き飛んでしまった。

——忙しなく日々が過ぎ、五月の中頃。終業時刻直前に、突然幸村に声をかけられた。

「小泉、ちょっと来い」

「は、はいっ」

幸村のデスクに向かった佐奈にひょいと渡されたのは、ミシン目のついた給料明細書だった。

佐奈はホッと息をつく。また怒られるのかと、ビクついてしまった。仕事のことでも頭がいっぱいで、今日が給料日だということをしつかり忘れていた。

「小泉が入社して一か月半が過ぎたってことか。どうだ、少しは慣れたか」

幸村は赤と青の二色ペンを指でぐるぐる回しながら話しかけてくる。いつになくご機嫌だ。

オフィスに残る部員達も、のんびりとした顔でこちらを眺めている。校了したばかりなので、皆余裕があるのだろう。

「少し慣れてきたと思います。仕事は……たくさん失敗しておりますが」

現状を正直に告げると、幸村は苦笑した。

「まあ、そうだな。失敗の内容も、かなり特殊というか、小泉ならではのどうか……」

佐奈がやらかしたミスの数々を、幸村はすべて把握している。ファッションセンスゼ口の新人とはいえ、とんちんかんな失敗ばかりだった。

「『バケツ』とは何を意味するか、今なら分かるな?」

佐奈は赤面しながら「はい」と答える。

忘れもしない、あれは入社五日目の午後——辻本が担当するモデル撮影が、社内スタジオで行われ、佐奈も準備を手伝った。緊張感に満ちた撮影現場。スタイリストの榎崎はスタッフに厳しく、たとえ新人でもミスは許さないと先輩達が噂していた。

その榎崎から『銀のバケツを用意して!』と指示が飛んだ。ファッション雑誌の撮影になぜバケツが必要なのだろう? 佐奈は不思議に思いながらも掃除用具入れに走り、大急ぎでブリキのバケツを持って行くと……

『ちょ……違うわよ。あなた、何を考えてるの!』

いきなり怒られ、おろおろしていると辻本が飛んできた。彼女が榎崎に渡したのは、

広口で、すんとした形の銀のバッグ。バッグとは、バッグ型バッグのことだったのだ。『掃除用のブリキのバケツって、いくら何でもあなた、そんな勘違い……』
 榎崎は嘖き出し、スタジオは笑いに包まれる。佐奈は真っ赤になり、ひたすら謝ったのだった。

—— 当時を思い出し、佐奈はまた恥ずかしくなる。

「ヴェリテの編集部員なら、ファクション用語の習得は必須だ。肝に銘じておけ」

「はい」

しゅんとして答えると、幸村は語調を緩めた。

「確かにお前は失敗続きだが、同じミスは繰り返さない。努力の証拠だ」

佐奈は目を瞬かせる。それは意外な評価だった。

ファクション雑誌編集部という未知の世界で、佐奈は一生懸命働いている。幸村に言われたとおり、まずは仕事を覚えることに集中した。辻本をはじめ他の部員もビシバシと鍛えてくれる。失敗しつつも、雑誌作りの流れがだんだん分かってきたところだ。

そして、鬼編集長がただの鬼ではないことも。

彼は部下のことをよく観察し、的確な指導をしている。言葉や態度が厳しいのは、相手のためを考えてのことだろう。はじめはとにかく怖い人だと思ったが、今はそんな風を感じられる。

だけど、佐奈にとつて恐ろしい存在であることは変わらない。毎日怒られているし、自分には特に厳しい気がする。だから、名前を呼ばれただけでも、つい畏縮してしまうのだ。

「そうそう、お前に渡そうと思ってたんだ」

幸村はデスクの引き出しからファイルを取り出し、佐奈に渡す。ファイルには、クリップで留めたコピー用紙が挟まっている。

「これは？」

「今のお前に必要な資料だ。参考にするといい」

何だろうと中身を確認し、佐奈は驚きの声を漏らす。

「えっ……」

赤インクで綴られた、達筆な手書きの文字に目をみはる。これは幸村の筆跡だ。

仕事で注意すべき点が箇条書きで並んでいる。しかもそれらは、研修用の資料などと違い、佐奈に対するアドバイスだった。

企画から校了まで、仕事の流れに沿って、佐奈に足りない部分を指摘している。

つまり、佐奈のために、幸村がわざわざ資料を作ってくれたのだ。ボールペンで書かれたアドバイスは、五枚にわたっている。

(ううっ……ダメ出しがびっしり。編集長、よく見てるんだな……)

冷汗を垂らしながら一枚ずつめくり、最後の数行が青インクで書かれていることに気づく。

その文字を目で追ひ、佐奈は息を呑んだ。

同じミスは繰り返さない。記憶力に優れている。先輩の話を素直に聞く——など、良い点が評価されている。赤インクよりはるかに少ないが、佐奈は微かな感動を覚えた。

編集長は佐奈のことは見てくれているのだ。そして、悪いところはもちろん、いいところも認めてくれている。

「あ、ありがとうございます。編集長、私のためにわざわざ作ってください……」

「暇を見つけてメモしただけだ。大したことじゃない。それに、お前にだけでなく、新人が入るたびに同じことをしている」

彼はこともなげに言い、二色ペンをカチカチとノックした。

「それより、赤と青の比率を早く逆転させてくれよ。今のままじゃ困るぞ」

「はい、編集長」

この人は、怒ってばかりの上司ではない。佐奈が一人前になるために厳しく指導し、頑張れば正当な評価をしてくれるのだ。

機嫌のいい幸村の顔を、佐奈はまっすぐに見つめた。

「それで、どうなんだ？ 小泉」

立ち読みサンプル はここまで

「えっ？」

何を訊かれているのか分からず戸惑っていると、幸村はペンの先で佐奈の給料明細書を指した。

「お前は、失敗しながらも仕事を頑張っている。ファッションの世界に触れて、少しはお洒落しやれをする気になっただろ。給料も出たことだし、新しい服でも買ったらどうだ」

幸村の瞳がきらりと光る。

「先月は半月分の給料だったからな。余裕がなくて服を買えなかったんじゃないか」

「あ……」

佐奈は相変わらず真つ黒スタイルだ。どうやら幸村は、経済的事情で『黒』から脱却できないのだと誤解しているようだ。そして給料が満額支払われる今月は、佐奈が服を買うと喜んでいるのだろう。

「編集長、違うんです。私は……」

「何なら、俺が見立ててやってもいいぞ」

「ええっ？ いやそんな、とんでもない。というか、服は買いませんので！」

ばたばたと手を横に振る佐奈に、幸村は表情を曇らせる。

「何だ、金が足りないのか。まさかいきなりハイブランドの服を買うつもりか？ お前

の場合、まずはファストファッションで十分だろ」